



芭蕉翁發句類題集



るみんぬまきくををつくるる世おの花乃
時侯を去りけし後にもあくおのつらひら
くらしくをとりてををつくるハ種植れ
樹のそよそよよらん空もやーあいてん空
あやうふもさう如ーはあらんわとくも紫
白猪よおらうて是能のあうそいあうらん
上右のそよそよ後ハまれゆておあくハ時乃



のそよみ実情をのこす紀長古々集茂
撰ふよかよひ秘教をたゞし學物あいたよ
うとていんまなくそよめたるあはるし廿九れく
梨よ志とくいと歌よむこころハたうぬ色道
義の粗白いあしへの歌よひとくえるゆへのおみ
惑しとくはくまらあのみ多しとこれと正風を
あそふ能士りんやもころむとめよ果隣三人
想ふ一世の夢句を教題よらあはらとてや

上構し是茂百五十巻の報恩ふさむと
いふあふよ放くろ名吹ふえをこころ招起ろ
一版をつつて小冊とくかこあへの追福のむを
たしと唯義めくめのみよりすりめとら守たかひ
あふたるうよまさられる謝徳あふとく相書あふ
よころとらあたらしく一句ふ季の詞あふの
あふをあふ中しとあはあふ入るともあひとく
撰者乃よとてとらなるこころむるこころあふれ

撰者の誤りもあつて、
月して再葉を加へ、
を其のハ初学の士同、
一重あつて、

大井川 浪も
清波や 浪も

はりの園め、
清くきや波り、
らき、

那、

一、
為 荆口の、
これを載

唐使凡の、
唐使凡や、
破凡、
是も再葉、

牛、
は神、
一直の

一 くのくくくくみ地ちうりくくく 小松砧

公羽のりりり紙扇とよし誤り入集せしと
イ本はあり紙扇とよし紙

一 宗房同名美人あはれ混一 何れかのあり

漁あはれくくく

一 山まくらを蜜柑のりりの黄よなりし

こまきこまき茅三のりりなまきこまきイ本黄り
く入りのありこまき 略く

一 よりのりりり紙扇ききやこまきのりり
を良のりりなまきイ本黄りのりりりりり

くくくくくく

是ホの紙まきこまきくく 後尺のおよ

よあはれ漁人りりり疎漏をこまきけしほく
かまきこまきくくく紙扇

芭蕉翁後句類題集



米津府松什 子録

春之部

正月

元日

歳旦

立春

正月とし笑懐と道にや 団月
元日や ありんかきひ 秋の音
えりきり 田毎の日にきき 忘れ
手こや 猿の 息せり 猿の面
於春に 大哉 喜 云々
もももも や 新年 少もも 米五升

春

齒朶

之胡或あり

餅を夢うり折詰る朶のそ枕

山家也喜

蓬萊

五方

誰聲そ志うり餅原ふ田の季

蓬萊うりもるもや伊勢のころ使

あきうりややと年え牛のり玉

湖政のせき尾よきをむくあ言

口を閉てし歌四日

葦水

大津絵の筆の付めや何佛

子日

子日——ふ初へゆん友えこの神

凍解

よ—野西り庵

凍とけて筆うり汲ひは清水乳

氷解

勢ひうりころり消ては流は魚

季吟勅をよき既

霞

和歌の波うりや出せり乃重葎

あ良うり

喜多礼や名もまよ山の物うり

大日枝や——を引捨へひらき

陽炎

枯きやまきころりふの——一寸

伊賀新大佛寺

丈六くろくきりふさ言——石のく

塔山旅宿

陽春のやう有るうら紙衣を
うけ流しや柴切の原の春をり

那州家のいづき

糸遊

いづちより結ひたまふるうら
入りたるり糸遊の名残り

善遊

春風

くしをまよひぬるうら
くしんやまをるうら
春風くし出

春風や人聲くろく三笠山

笠寺を納

春雨

笠寺やくくぬ密いしうら
くし雨や蓬を伸しそよの道

くし雨や蓬を伸しそよの道

くし雨や蓬を伸しそよの道

赤坂庵

赤坂庵くし

赤坂庵くし

赤坂庵くし

芥菜

熱このころ、園中より三よの種をとり
けし雨や二葉入りしきる茄子種
らんしやふたふた煮ころりし菜れ
四方よりうきるしきころりし菜れ
古畑よりなるれつこりし男とも
一とせしりし一夜つよみくもつ群る
石川か鯉生の金身も店子我つきて
悪んとし芥の食煮をせし深川
持味しきる善地坊屋の芥をわかしと
二世代の体もいりきしふ覚中

芥

土筆

若草

春草

聖老娘

菅

猫活

我しあゝ、朝哺のころ芥の食
汁しえしや墨子せり焼をいふる
まふさうし袴よそあつとくし
圃角扇より漢を望むし
前娘しえしやわら子の高むりれ
木草の情をさや生ぬくころのさ
善提山
山寺の山しと告よとらら回ら
ちき拵しえしや女機りよる
ちる官よりうしと紫の芽うとらん

海苔

著の先づ花をさへし 櫻の
老慵

蟻よりハのしをハ老の棄しせし
おとらひや巻く浪出る一の砂

海苔をあらわす

乃り汁のふきハ又やたり海苔梳

栴

この栴は半るる高き啼つハ
右のつめや難波の二年栴

このめやきくおらるる京を平

きくを栴はまき引凡もハ

竹内一枝杆

世よりまぬ栴は一枝乃をまぬ

あまの子の石を寄付くまよふは出る

すまし道表らむのこのひよりまぬ枝さ

そらふ垣植の栴はまきくを是を

あまのこをまぬハこの隣の栴は

まらぬやふいよぬハなむは栴は

まらぬやふいよぬハなむは栴は

伊賀のあらしよ

旅鳥のうらまへつめくめ

訪山記

うめおのきりや朝をぬき

林咲てしうららふり鳥のさきり

うめおのきりや朝をぬき

山里ハ茶葉おきり

奈良

阿多良の心まき

車袋草子月結

月結や林くさりり

山の家

自決りむききつ

伊賀の山家うらら

より堀出で新とん

あらしをさし

言案野あり

と云物あり

あらし

香くあり

一とせ春のさう旅旅や——ひきま
り脚のほよ知人うきまう作らうこの
まらちのおくまらうけりま我ま
を訪りれま

又いとしの燕のカーささう児の花
子良敷のうらふ梅ありといま

柳子良子のうらとゆら——すめのま
網代民初らあうま

梅の木うらうけやう木や梅の花
里のふようめわのうまを牛乃鞭

園めさう

暖簾の奥との中——山乃うら
まらしやう——まきこのふ月と梅
人いしぬまや鏡乃うらうのうめ
ままらほをまらうのうらやま昔まを
弱弱のさう——うらまを——うまのま

何う新八ままの二月がまらう——城
一南島のうらう父梅丸子のうらうはまらう
うらうまらうむらうのうらあうらう
梅らまらうのうらうあう山路うら

柳

あらしや風や面をまよふ柳の娘
餅言をきく糸とをくやめき外

在原寺より

言を認めし眠る嬉やを能

探雖も對して

そらぐの心相りさるる人

古川了るこゝろを芽を法柳の

吹度ふ蝶乃居を何事あまた

唯杜國

笠の緒しやめきこころの旅出れ

椿

腫ものり柳のさるる生まらぬ

その雨いとせり降りてかき

くさるる近きあつり柳乃をり

くさるる春光きしうあの中

いさるるやいななれ

い九間空く雨降やめぬり柳

傘より押りけりやあまたの

葉乃の笠つるさつを能の種

葉よりしむる椿や花の朱にあら

花さるる水に何くさるる

春の駒
猫の意

お水やほらきあさけ竹の葉
さる里の尻しきりぬきよの駒
福このあゝ寤の萌よりいよひたり
まもわかか大さつけし猫の意

田家

白魚

麦めしふやうも燕ねこ乃妻
福よの意やむ時固りおなる月
岸よりきく白魚やとらほほ入す
あけたのや白くをまらよる一寸
為陸下向しは石を出し舟送るのふ

船のふりしきるおろるやれうね

蛭子漢

瀬祭魚

七つら魚や運き目をあぐ法の綱
腰所いりくさるあて
猿のまわりくさる木よ瀬田の葉
相國寺のまき

鶯

うさむらま感ある竹のくちや
鶯や柳のうさむらま前
うさむらまや餅く糞まき標の先
なすまらみえんつらうねひら

千代

原中やあのみつらん啼き

猿啼

ひもさより上りしやまは味ん

杉風夢窓

二月

きけりるは二月中旬旬ころ花子

二月十日神話山をゆき

裸よりまきこころききの岩の南

枕月

花のたよりをたしりてや望月

名所の禮のつら

貝寄風

貝よもる風のきりなや和歌のうら

二月十日とく是揚の新境

聖門より入を始る

初午

まら午より初乃より一と窓六

彼岸

くふひん菩提の種を討りし御

伊勢より

涅槃會

神垣やけりひんじん神人像

二月十日

水取

水と里やこりまの僧の塔乃言

待花

まつ花や藤之原より一の山

初花

くらまよりいのち七十五寺白と

言那

父母のまゝなりふ意しすの考
を雀啼巾の拍子や旅のこゝろ
蛇とくもすハおろろ——蛇の聲

道世の時

帰鷹
雀子

やと隔つ友りや鷹の活きれ
まゝあ子とあし啼こゝろん氣の柔
隣廣のゆる波旅り趣れを
少る柔しとあしおろろま隣り
古池やこゝろおろろ心水の音

鳥巢
蛙

蛙子ハ目まじり 輪を啼き言可申

莊子画讚

りらり——の何は同人とふ地蝶
怒誰と素——たうらうらうの群
く——まら——とれハ

蝶

夫やてふ我や莊子の夢こゝろ
との好やよなまねま——とまら蝶
てふの翁こゝろ——那中——の口歌りハ

下木亭

蝶の羽乃 幾度こゝろゆる蝶の羽

田螺

起よくわの友より世を拜りぬこふ
袖より居しし田中の塔の像をたき
芽野をたつ村

籬

飯具や雨よりとるしりて田螺きく
内裡ひきき人形天のまの所をよきや
こころまねのこころ思ひをよきかきこえ
心よりこころこころあつて水の流るる
尾をね知れぬ人おぼくぬれ人を見
あまをこころ娘嫁をたつ人かた水
そのたも住のつる世を銀のの家

湖下

重三

青柳の流るるきりり白子水
子尾は桃梅ありつるよき菊岩雪あり
あのをこころと桃とさきくやそのこころ
うひりりや一里おとるる小山伏

子餅
峯八

伏見西岸寺

我衣より伏見のこころの二葉せよ
水に餅こころと喰らねえ、乃花
当白と浪つ来へつる
多一ねもこころ宿る木幡丸

桃

梅

古寺の梅より来りし男の乳
舟ありしやとむ時あり深の秋
きこゆ人

命やろ中よ活るるまじくふ

探ね子別野

とらぬのりりありは出久梅の如

乾坤を任

りしやとむとらぬのりりありは出久梅の如

命やろ中よ活るるまじくふ

山家

山梅

鶴の巣の岸の外乃まじくうらぬ
扇より活るむじりややぬちぬ
木のこまじり汁は繪も梅の如

つあや別野

手こやまじりか肥まきまの差

春の如く梅よりぬては奔々ぬ

雨よりぬぬ

子夜の如くぬぬぬぬぬぬぬぬ

初濃まじりぬぬぬぬぬぬぬぬ

うらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

しりぞきまじ

すもゆきし風ふらふの先きやろ
歌よりの先き多くしりぞきまじ

上陸廻

るまるとしりぞきまじしりぞきまじ

句空への文

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

赤良七手七事依り置八重をく

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

重櫻
系櫻

姥櫻
大櫻
桜

花見

姥さくしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

しりぞきまじしりぞきまじしりぞきまじ

秋通々陸奥より越えし時

子守りくまのちかやてんま

玄席子ら深川の旅舎を訪

つとむらととまの母をてん物束

上野の花からまのゆふの幕

うらさつまた物のきふこのあつさか

ありとまのあつさかのあつさか

四つ五若のころらぬまをてん

畏ゆつまの花をてん四日天の茶志

水毛よはいと地つたてん

河まむらゆ昭伊のほまむら

茶頂山よりまの茶のま

林まむらむらむらむら

花の雲

親書の葉をてん

茶庵

まのてん鐘ハ上野の茶

僧寺吟詩別

朝の毛乃ららきや

先初や直竹、尺ハ

茶の雲

花

上野乃真

花は酔ひの織り成す刀を以て女

夏方知酒を多飲覚神

と飲りて浮き我は土云く食草

うら山や外様——人の志きり

堀堀と出よ浮世乃のまひりて為

紅ももたきりて身もまひりて高年駒

交ちりて——その口をえりて人の心

花の心もまひりて昔の望れ侍りて

是より明ぬるまきや 歌の歌をら

うら風より吹出——笑ふ花をいりて

きりりてやまのまらりてまはしめありて

きりりてきりりて花の念佛中きりりて

湖水眺望

幸崎乃花をすり脱りて

訪山陰

檀の木乃花を——のまらぬまらぬ

花を咲て七日朝乃をいりてとりて

物皆自得

花は——山陰を咲てひりて友をいりて

あまハ槍くらやぬの志本のいつら
育きのふハ夢とさそし望ハいふも
只生か一程のくみひのかよあまやと
そそそそそそそそそそそそそそそそ
まじりや花のあまらぬあまらぬ
瓢箪庵は膝をひかき旅のおとこ
いとあまらぬをせ

花をさうけりめ旅や二十の日は

瓢箪庵より旅立ちまも

この花をさうけりめ旅や二十の日は

古昔や花の旅出乃 拾ひまき

詠門二句

詠門のさや上戸のおとこせえ
酒のこころ語らんかき旅の花

よー野々

とれさうり山ハ日ららつ朝日け
まけらるハまの上さる月夜りれ
その尾村より

花のうけ 謡く似たり松蔭式
芳城のふとをさうり 芳の花を

神ハハ成りてくると暖のそよよと
敷を〜のの神なり〜
〜の口さき〜昔も昔も伝説ハ
於乃〜
長身五葉〜の末伊勢〜我
所甘樹のおもひ〜改よ〜
ゆりぬれ〜
うけや〜
る心地〜
神皇のまよと公卿〜

ゆりま〜神〜

何の本乃〜
種や〜花の香ハ〜

詠子〜

旅衣のゆ〜

伊勢の國〜
さ〜の神〜

一里ハ〜

着せ〜

赤子の松〜

酒造筆記

四才より一斗吹ひ水し酒の初
これの千に成りしものも丸尾

丸山

花のゆへ所の丸ハ大遊園
支考は陸奥へあるを云す

はこころ推せよ丸ハ一五六一里
尾張のつんすは一橋本等の稻法
茶一種おろしを人ふまゝとす
飲めし丸法は「世評」二休稿

西行傳譜

よそへ付くはハなきまゝのと物人
とて古きの牌りま

あむとらそあれきの牌ハうれはま
永門人

みり飽と中人よりそそまひま

浦山の書より採書と書一巻の譜
ちる心やまのりおとらと琴乃塵
正法治りま

西行の廣えあしんこれの巻

茶接

脚躑

根を六とて麻あらしめぬとて茶
煎ぬもこのまゝにうらや

茶うらやぬにぬれたるは花の葉
坦坐おをを侍

北の側さ相しつる花の別れ

孤石のころのまじりて

むと起つし隣のまゝ乃らぬんは

指らんや茶をうらやの秋も知つて

茶店

つ——活しそらけふに鶴に教へ女

茶店

裾山や吐あとの夕は

大和り脚の時母は市とやふあ

まじりのころのまじりて

茶をうらやぬまゝ

茶外て宿るころや

那須のや岸寺佛頂神師の

小庵まじりて

留るころのまじりて

山吹のや茶葉のまじりて

茶

山吹

西河

何うくともやふあまのちしほの言

画潰

中も少老や字法の懐燈のふり
や乃以や笠うしきんくま枝乃形
つよハ鱗の目うしんかきり思あそこ
山詠来下何や中りーまねま

悼呂丸

昔懐よりあはれハ塔のすこきき

田家よりまの言葉も傳

望 薊

春の言

行春

八木の輪もきこくはまのこれ
鐘つゝぬ里ハ何をさま乃くま
ゆくまふ和歌のまきと付たり
留別

行まもや鳥啼一魚の目を返

望湖水惜春

行まををこはの人やをさしこる
杉柳 まうりあふりぬ女の柳
乙女東武り飾り
うめあ菜鞠子の宿りこり汁

春雜

のまゝ木ぬ屋敷く乃うめ柳
初瀬
春の歌や籠り人ゆき堂の隅
うさふ春潮のまを浦の春

夏之部

四月
更衣
短衣
灌佛

昔の山歩の末夏や四月のまじり
ひらけ服しりくふ原ぬらもこ
うーうや解法の能く耳あつ
灌佛や皺多ありま珠敷のま
たまらぬま

牡丹

灌佛のやうに生るるあふ鹿のまじり
尾花よりま武りりし
ゆへん葉深くはみ出さ蜂の名残ハ
牡丹 新も白盡白満

杜若

言ふふ家や日入の花乃密
のまろそい似たりや似たり水のうけ
うへん三河あしをまき麦のこをわさ

大坂より

おきつるい評も旅のひとらの
の崎宗澄屋敷よりし近衛殿の
宗澄よりしききおれをのきつるを
おしききおれをのきつるを
あつていふまゝにねまふこのまは
鳴海おはなり

粟粟

杜若我より麦りのおりひあり
白りや時雨の花の咲つらん

強杜若

白草いふおそく蝶のこをい

浜磨

海士の類まつらんやりのを
名ふ、親のうら

秋や浜磨こや秋初る麦日和

冬粟の

いとせし 植麦 咲らんそのまを

麦

山山歌のーや風の筋

首柿舎

抽の花

抽のまゝ苦をまの料理の同

悼大願和尚

松窓のうのこれおむをこれ

を角の母五七の道草

卯のむら母をまき宿をまを

うのまおやまの柳の及こ

渡河の園に入て

重徳

まの池や花をうこれ茶の良

二葉軒

菖花

やふつまの門ハむまののま葉ん

園の住まおのー大垣の旅を

訪事ありーふのれをーらみきと

いふらんまの宗祇の若うはむし

うらのまハ仇はせん花のあと

汗六の木を海をぬむ時ニりのうら

権花

権の花の心もれ似よ木香の旅

小督境ま

筍

うきやーやたけのことをもく人の果

鯉

鮎
杜鰩

けのこや稚き時の繪のまを
 せし城人少老の中山まらうらを
 うら然うらうらをうら人を碑ま
 撫金をまま一出らうらうらうら城
 みる一あう都府まらうらを
 作らうらまらうらうらうらまら
 一人一穂菜山の木うらまら
 まらうらまらまらまら
 又たらまらうらうら川のあゆ繪
 まらうらまらまらまらまら

けのこや稚き時の繪のまを
 せし城人少老の中山まらうらを
 うら然うらうらをうら人を碑ま
 撫金をまま一出らうらうらうら城
 みる一あう都府まらうらを
 作らうらまらうらうらうらまら
 一人一穂菜山の木うらまら
 まらうらまらまらまら
 又たらまらうらうら川のあゆ繪
 まらうらまらまらまらまら

鉄蓋の峰よの白の二白

浪磨の誓乃先先よ啼や子規
あゝまゝに消りたりや啼到ら
津一と啼くは花そよよのけ

素足の跡

けやまのうしろの流乃うら
こころのく一足の葉の白行
の志のうしろを尋て教生る足ん
いよよの跡はあゝ雨うら出れは先
あまのうしろとやあまのうしろ

若草のやうくの若の跡

那浪野のうら

雪を横くうらひきよめよ
ふと一周忌琴は母り
けやまの浪野高や古き硯箱
子規の跡を横くや水のうら
あまのうしろとやあまのうしろ

浪のうら

白のうら浪大竹の敷をもる月夜
杜宇のうらと麦のうら尾花

何れもまた啼や五尺のあやま

と一竿あつてあり

まらへ竿や捨らんあたま

仙臺より

田や貴や中より布乃子規

夏夜僧

んくもやれ出たのほらま

あまのやさし物より神

木とれや茶搦るやあ規

鳥賊責のあまよりいれ

閑子書

行子

うき我をまひりてまよふん

能なるの福より我をりて

四つはあまより一沼川の尾を

まよふ

老常

うらむまや竹の子数ふ老を啼

鶺鴒舟もあつてあまより

鶺鴒

おとろろくやまてあま鶺鴒舟

まよふあまのあまよりあま

別舊友

鹿袋角

二まよふやれあまよりあま

蝨 蠅 蝨

滅はす磨明らるるのまじふとふし
わらうとくははのあつたあはれ
やうと今ハ中へちの中はあを
うらひて人の世の業をともすや
うらうとあま角やうとけよは磨の石
は六も木を夜まかりむく時二のち
うきく乃振りかきくへ木の塊
林の塊をむ位座よとあへ
我若ハ故のちひまをを記きまれ
清風こり

蝨 蠅

うらあよ何屋下のひよのころ
屋をれも首節あまきゆり
魚くくくく荆をつむむるけ
木を治の旅ありひくく大は
きまらぬ懐田の業をかんあ
このちりる田毎の月くくく
その業をさあふり花はるる外
上林こ入こり
けいこちや船以碑くおるう
おの火を木このちくくや花のち

五月

古くより

海に水ひびく降の寺五月に
奥州名取の郡に入て中納言方の
塚にりてやとておぼわさすより一里
半よりたの方谷にありしあり
ありとてふはつとて五月雨
いよとていよとていよとて

美濃をりてとてまきのぬりて道

さしとて高士の田にありて

田にありて五月雨

五月雨

五月の雨岩捨茶の翠にやとてそ
さしとて五月の雨
五月雨に激しぬる川
五月雨に激しぬる川
五月雨に激しぬる川

病中白脈

五月の雨

五月の雨

河武隈川の水源

五月の雨

中なるちりき

五月の雨降 残りさや光望
まきとまきを集めて一雨一雨
は乃さきや暮るる五月雨

落神合歌破

五月のや色紙 魚きこも登の波
らとを社や春ららら素の畑

高川一十帖

まきとまき 登のうき 岩松をあら
五月の雨 志きこも登の波 大井川

水出ゆるり北かどめしけし 湯白ふ
道筋すぬ舟ぬ竹をよみ人のほ
ありきこも登のうき

五月の雨 雲 岩 相とせ 大井川

まきとまき 登のうき 岩松をあら
まきの雨 志きこも登の波 大井川

栞雨

まきとまき 登のうき 岩松をあら
降きや耳もまきとまき 栞の雨
信懐の洗る
入栞まきのまきとまき 雨やまきとまき

世を旅し代々山田のりそ

彦田氏のこころ

素つげーさのそらや田の屋

賦水ニ

早苗

雨そらけりしやまの早苗

粟ぬとの川ふ出ニ

西の東にまつ早苗ゆる凡の音

早苗ゆる我色くらき口敷の南

志のふの初とふの里とやふ子摺の
名跡とてカニ

はるハ昔女の初りひよ存とてなりそ

西の文字ありともや山麓をさし

故よ志のふとせとてなぐさあり今を

みりふはせしるの面ハふきふ成れハ

ませしは情もるくは情水もるま

く昔おのくはあつてはれハ

早苗とてふまをちやむー志の摺

清風ニ

紅の花

り末を誰か肌をれんへにのそ

肩柳をけりしけりしおのれ

昔心の時

鐵線花

友らられあを重丁の乃鉄線花

子珊(こざん)

紫陽花

あらしあや葉を小庭の列座友

百合花

あらしあや帷子時又うらうらあは黄
うらうらあまそのひめ中りや唇まひ

瞿麦

群てこぼれんをささここさるるのこ人

正成(せいせい)の像

鐵肝石心は人之情

あらしあや波や浦の波

瓜の花

何程お波もましく古き古瓢うら
のまをいけく下まき弦の響を
置て花をさすまき古瓢面をけ
瓜の花常いりすうらうらあは

まき古瓢うらうらあはうらうらの盛れ

幻位(まぼろし)のうらうらあは

うらうらあはうらうらあはうらうらあは

重行(しげゆき)

茄子

あらしあや山を歩むのうらうらあは

あらしあやうらうらあは

昔きまのしるしを茶のくふあまの汁

こるこり

藜

中をを并し藜の杖ををらまを

木田より竹研

竹植

降しにるん竹のうらまはみのとま

葉の葉

くまのこ葉や花をまき蝶の世捨る

訪はる者

栗の花

さのく人乃かろけぬ花や軒のく

是をさうやましくひて

標の系

らんこくともあやちや雨の花をま

合歡花

象酒や白くし西施のゆめのをれ

李

そのくましく竹笠破けてるあま

内川よは行りふ文をつまをまに

水鏡

関中の宿を水鏡う問まらるの

大津波仙

くのちる水鏡九志ぬ能まれ

高川よりつらゆかまをさき送りて

ともはほしあ田成りまのくしん

くひま常とくのかくまやゆかま

関のちや弟をまをらるし

水鏡の巢

六月

六月や 峯一うや おく 宍山

そらもきき丸や くらんもりあや
杉風採茶尾

水月

香の河 縁左膝 水月月の鯉

水月月と 腹痛や 暑の節
水月月や 鯛ハあはれり 白鯨

ふ子の方まうり くらんもり 関てこの園

よりき来方 中書し ゆるり

土用干

ちきくの小袖ルい ますや 土用干

暑

蛤の口 けきなる あらきり

ちりちりまき 海ふいり 宍上川

新庄の風

氷室

水のおく 氷室を たらぬ 柳の節

出お月山

やの峯

くらのく 保い かつ 崩て 月の中

本馬と ころと ころと ますの ころと

太夫と 名を 梅 ころと ころと

ひしつと あらぬ ぬや 土用の ころと

酒や 暑き ころと ころと の 峯

凡煮

ゆの ころと 土用 ころと 宍上川

涼

游方記

漣やゆののまのりの相ひきり

お墨山より

ありのこや雲かこをく人南の

小倉山院

松林をゆりてやゆののまをさき

石川大山に像

ゆのまをぬ織ハ襟もつらまをん

宿押よとらるるのくみり少きま

四林ルるのくみり園の宿涼み

住りる人のおき ことなるそはま

一々なるそはまを訪へ

ふつらるる者あはれをゆくゆふまをこ

文解子出しの像を贈るはまは

南も佛 子の素ルまをくみり

小松の中一のみを

いのちをりまのりのまの下のまをこ

杉木のまをまを水のまをこ

破れりる影や弱るゆふまをみ

風瀑録

ワキハルハ小波の中 山ましとさしめ
十六橋 記ありし略して

はあつり白くく 石舟とそめ皆涼し
はなゆき

とま ー さま我者中 ー 福重也
とま ー さまやほの三日月のお置山

袖の浦眺望

あらこらや吹くくく 舟まき ー 舟
汐城や朝腫ゆれく 海涼し

花のうへへこくともよ 船ひきくをき 橋

七いすの 柑満寺の志り入る 跡で

影浪をいむるもく 夕晴いと涼し 北

つをまきや 橋より 涼む浪の花

小鯛とまき 柳とまき ー や海さう軒

四糸の河系の 跡線とまき 夕月おの

比よりまの 鳴るこくまき 川中 ー 小

床をまき ー へて おまき ー 河の ー 地

とま おまき 女に 帯の 結めいれめ ー 男

いお おまき ー 志き ー へは 師老い 命

ま ー けい 梅屋 被浪屋の ー ことまき

いさかほる 顔のしるし

川尻や 落柿 中

曲翠のよは 好む 田舎の 野を 見

飯あふく かくり 馳走や ツツミ

川中の 根木 凍の 形

聖水 彩也

まき 指図 名を 信ひ

吉野 山

涼 枝乃 形

東武より 上りて 人ふ 歩

東海の 毛勝 ちり 床

聖明 寺

まき 絵 写り 踏跡の 竹

あし 船 舟の 形

政草 山

城 古井の 清 水 同

那 漢の 温泉 神 殿

道 ちり 神 方 水 小

湯 ちり ちり 同 石 清 水

清 水

汗

むきふよりちや暑まびく志らぬ
汗水やし 聖なる乃 夏山伏
光明寺より

あせの手をぬぐい 衣あはれし 行者堂

晋の洗面をこころやせ

筆

高きよりし 筆の穂の書やうり
筆高うし 向の像

その中 紙うし 筆の穂の書やうり

そのよは 筆の穂の書やうり

圓扇

うらなは 扇のあはれし 向

聖の心

心太

清涼の水汲よせし 心太

ふたの舟は 聖

慈明寺

水あけし あはれし 慈明寺

本居の心 慈明寺

あはれし 慈明寺

蓮

けものあはれし 蓮の心

枝をうらみ 蓮の心

あはれし 蓮の心

聖類

山顔

おもしろいのこゝろに眠るを言ふに如
子修およそこのおさまね山おひりん
平田李由は又の言信下り
ひまわりを言ひ寝せしもの床の
クいの初めをいふもや身もろくも
ゆふの初めのおの夜架は紙燈とを
ゆふ初めや酔て顔出た言の穴
夕顔の干瓢むすこおひりり
なるるを言ひこまをいふ上の鏡の腸
甲斐山中

水葱

首尾

山崎の頭因るむろくこの形
首尾何りのまよふ初め
穂葉の松の下涼くてもまよひの松
なまこむいほりり

瓜

山のけや方を表もんくはけ
言来のあまも
初めをいふもよも涼く瓜の尻
くいの皮むすこもろくやまよひ
周の夜下松下もよも言来
まろ言来たを言ひや日くん物やせん

言葉瓜

柳行木字片の荷ハ涼——とら吉葉

之道う對——

我う似なきら不割——吉葉うり

散松葉

清籠や波うちりこむ吉葉松葉

蟬

指ゆりあきそ——落りてせこのうら

杉凡生衣いと清くうら調——

おろりてれこ

いとや我よきよぬ忌うら蟬ころ丸

松葉山

撞鐘丸ひびくやうらうらせいのこころ

並石寺

きつらさや思うて入せいのち

甘き丸速

秋死ぬる——きハんて蟬の聲

のろおほ

夏の月

蛸壺やまらたまふ夢をまらの月

手を打も研うりゆる友乃月

まらの月清油より出く赤坂や

大津木常こころ

秋過ぎ

秋ちり観心のよるや四巻半

夏雜

武隈の松より

揚より松をよみ木を二月に

おき

辨きよい友え紙衣のぬたうまぬ

よねまやまきけくまぬお

甲斐の物内とくまよとくま

の昔吟

言はく我を繪うり思ふまらぬ

帰庵

あつらふもいさく風をどうつらき

を海やまらのるの船ころり

於山や葉一てをゆるまらの雨

あら山や松一タロの一里鐘

ま来たも只ひら葉のゆらり風

川をいりもあつらふや浪磨の友

岩林のゆ一雜きそのをうま

りては悼し

そらきくくもくしそらに友理八

手裏見の流

きけくく流くもらや友のゆめ

那波の光のちりり

夜ゆりしは流をねむる途に
なす山や紙漉しを合時分
練つて人を志をうの夏野分

救世石

石のまゝやまらそよまらそよまら

松崎

鳥こやふこくし碎れそまら海
松一まや友を衣裳の水と月

秋野の佳景を記す

山が海えうのまき刀もやまら

尿前山家

琴風さりの尿まらまらまら

高嶺まら

ちんまらや兵としら夢のあと

井持氏水橋

せのまやゆねまらまら流のうへ

曲野まらまら

夏の夜や崩き結ゆり冷川の
まらの夜やこころのつたの書

桐麻畑 とうきよやあし のまきし麻

本白言

秋の節

直江津より

文月 文月や 夕夕に 暮の夜を 似ん
今朝の秋 けしやまら 猶うらさく 夕夕の秋

四海眺望

初秋 ころ秋や 海に 喜田乃 一つとあり
初秋や 夕夕に 暮の夜を 似ん
秋来りまら 耳をたらし 枕の風

あま来ぬと ありて 夕夕の皮
夕夕のやまら 夕夕の皮と 秋の来ぬ

残暑

中納言より故のころよりしるす残暑を

西条津の庵より残暑の心を

冷

ひやくと忍びをいふ人にてひるも残れ

は旦の夜ををいふとて

身より

野をしらし故より人の一むろふ

虫の季下

移妻

いふつらひにみよしとて書紙の紙切らぬ

宿敵候

あの子に松あをむつらるるよりいれ

或切織の目よりいれ御大様のなをい

とやいとみよしとて

いふつらひに悟らぬ人のたをとてよ

栗津より

いふつらひに湖の物りて故切らぬ人

本旨のよきもは骸骨ともの為故を

うらみして能するふをいふて奔者あり

忍びうらみたりやうしよは生おの愛を

なとほおしとていふ人やうの弱さを

枕より残暑をいふとていふ人の心

只この生をいふとていふ人の心より

七夕

いれは乃や萩のささづつすきき徳
縮つやや書乃ささづつすきき徳
月弓や塔の一松男ためま
もまもこのあふぬささづつすきき徳
何ういふ代にたささづつすきき徳
ささづつすきき徳乃ささづつすきき徳
七夕や秋ささづつすきき徳
名ふいひ徳乃ささづつすきき徳

星之合

何いの中やたささづつすきき徳田川
合秋の本のささづつすきき徳

銀河

まふまの母七十あさづつすきき徳
七もささづつすきき徳乃ささづつすきき徳
をささづつすきき徳乃ささづつすきき徳
結縁よなれてなま七更のささづつすきき徳
七株のささづつすきき徳乃ささづつすきき徳
吊雨星
言水ささづつすきき徳乃ささづつすきき徳
水ささづつすきき徳乃ささづつすきき徳
出雲崎乃ささづつすきき徳
蒼波や佐渡乃ささづつすきき徳乃ささづつすきき徳

よー燈西り尾

祝洗

祝あふふ切道ハ出たりうけは洗

盆

夕月や盆挑灯ハ物多争礼

甲戌の秋大徳うへり成りあは
の海より消息せしれと進六福と云ふ

仰りて多會を言とて

慕叅

家ハハ家秋う白後のはらまわ

魂祭

道徳やわらうそまゝさるうり

か智の園なる

盤坂のゆるしや 三つ乃多もつ

多部山

たさうつうそふえ焼場のさうり

尾まのうら方まううらとて

数さうぬ方とふ思ひそふまう

光重の西園うりて

二言古

旅うしす二百十のえ 船支度

丸雲のを籠ちをさる付金環の

お枝やうれうり

初置

このあてふるまさくおうり

暴風

秋風

詩人しりをかきまひき子文余かまは
所壺子と筆をこまきこまきちや
獲姑射の巧の神人あこしき詩を
よきぞこま画をよませし

雪正霧の暫時百景然ほくしり
きう時百の富まをかぬるそおちり
枯れともりしひもく然もまこり
少き花す石も跡石の野分すれ
地何と書然何となくあきの風
秋風のやりまの口やとこりし

憐捨子

殊をゆく人まこし子に秋の風
義朝のこころらうしひらあまの
あまのこまや暮れし留れに彼の園
方みしこま大根うしりし秋の
一笑は著

塔もつこま中我は著し秋の風
道中

赤くともくしきまをくしあきの風
秋の親書

石山の石よりきりきり——あまの風

強桃天号

桃の木の花の葉ちりり秋のそ

中村をさそ

あまの月伊勢の葉系於凍

秋の風吹ともきり——栗乃穂

望右之記

人の體をさるるをれりて故説かれ

物心へい居きむ——あまの乃り

昔の秋のやききを

秋のや相り勸一葉の——し

伊勢記りの説

西ひり——あつれを同——秋の風

悼松倉嵐景

秋のうをれりて秋す葉の秋

聖水の旅行をさそ

見まうのうりやまひ——秋の風

柳陰軒まき

あやれきりあまも我も鐘をす

全昌寺まき

散柳

木槿

庭挿て出さやちうららる柳
花本槿はくさ喜のうき

百上の火

ささこの木槿はさうら

桐一葉

よもろをいつ一葉う虫の旅探て

尚書うおと

ささこの木槿はさうら

常麻寺う

朝顔

僧あさるぬい久死うる佐の松

朝顔のささう常麻寺う

和真角葉書り

あさるぬい久死うる佐の松

尚書うおと

朝顔のささう常麻寺う

今那解う送て

何さるぬい久死うる佐の松

田園

あさるぬい久死うる佐の松

朝顔や

有 蘭 草 菊 宜 心

蘭

敷原の茶院

門より入らば種族ししらにのまを
悦堂和尚の庭にまきしおれし
香をばらば茶焙茶のやきししん

茶店より

茶のまきや蝶のつらきまきし
秋海棠西風のつらきまきし
女郎花
玉川のぬきしおれし
むらさきしおれし

瓢の銘

米のちきりて瓢をこぼし

巻談

芭蕉

新啼やその新にまきし

芽舎の感

はせをばらけし
は寺をばらけし
萩のまきし
萩のまきし
萩のまきし
萩のまきし
萩のまきし
萩のまきし
萩のまきし
萩のまきし

芋花

高田督師細川書房より

菜園のいつ迄の花を芋まきし
芋いふれれおのくそこのまきしり
仲秋中のつはまよ遊て芋瓢
の瓢をる

瓢

夕ふや秋はいつくの瓢玉丸
のり理りて

葱

清廟芋を經てしあふ何は葱子
木重塔の葱庵をまき敷戸の金銀
芋の戸を知られ種菜は唐より

薯蓣

くまぬりおそ菜汁ふるり
大凡のあしこも赤唐くし
まきくてもあそまらぬを芋薯
子芋の薯蓣里より

綿

わさろや 毳毼よそくきむ竹の眞
故くしきこ

冬瓜

冬瓜や 互りしりけり
悼仙風

芋

芋向りしりいんハ蓮よりしり
西行名

虫 蚕

いしあし女ありなまら歌よま
夜も寝し中ハ月下の葉を穿つ
髪もほそ宵やこころしそ
しつこや寝ころ登のあらしを
床より来て軒ま入やきりくれ
物あし多習もこむきりくす
白髪ぬくおろしらの下やまをん
まひしや・新しうけし蚕
加賀の小松とよふ太田の神社の宮
おとこし・夏はきりくしるの甲

高 鈴

葉 虫

日く鈴のきれありをきりくす
まのあしうらにれろおとし
むしや乳甲のトろせりくし
猪の床より入やきりくし
海士の家ハ小艇しりまらんと
蜻蛉やとつつきりけしそ
子の飛り住居あり林のけりけ
なまらこれ友とらの方けりけ
らのむしり喜成すよまよ子の尾
田莊浜家

鶉

鹿鳴

桐の木うらうらう啼きなる塙のうら
鷹の目し今やこれぬを鳴らうら
田中のは花さうらねぞ

川あやや子猫もくくの鳴りこゑ
むきー理や一寸何なをーうのき
のれうらう牝鹿もよや牝鹿お
奈良も

ひもと啼き死なうぞーよまのー
名ふい體のうら

秋暮

秋の暮

曲筆の歌

乳麴の下をきくまらよをきく乳
六曲六曲の二人はまらよをきく尾を
訪まらうらうのあやをきく

いくさやを痛うかりひや秋のふれ
雪の旅をれらうらうら秋の暮
魚菜もくくー冥途もくくや秋の暮
あまのくれ男は泣ぬらのをれらうら

本因

死にせぬ旅孫の果よあまのをれ

名月

照をきぬてしとんとあり

名月の出づや五十一ヶ條
重くと名月の原や茶白山

敷賀掾泊

名月や小園のよりきこあたま

名月ましくつらみそり津田の月

魚類

夏くちや名月あつた涼りれ

名月や池水うらうらふ七小町

名月や思進をうらを乃椽

名月や鶴雁たがききこ了得

名月や月れを宮架のけわり

名月や我がうらをら門後坊

深川

名月やつらき事さゆら

伊賀山中

名月の花りとるや強きひ

名月くき葉のきりや田のうり

名月や池をわらうやよまきら

名月や西よか回よあまひら

等哉うゝ尋あひひ

名月の忍ふ心くゝとみ麻せん

茂仲さま

今月

月見

三井寺の門たゞりまやまの月
木を伐てしそと口月をよけの月
忍ふけやすく片形を宵月見
空をくくく人休る月見りれ
空以とくく人見りれ月見り

庶崎振本寺

ちりり麻しきまもと能ある月見

田家

晴の子や鴉まうりけそ月を忍る

流ぬの橋をのりしはまはさくらとては流り
ゆしの橋はさくら一条あきむつのとあおを

朝むつや 月見の旅の明を忍れ

月かみさよよ玉江の月見はくくぬ先

古寺観月

月見とくく月見くくく月見くく

月見とくく月見くく

未くく友を今よむの月見の夜

十六段

いさよふもやしく文科の那う那

お出の演うし

十六段や海を煮るるの膏の園

望田十台

鎖の月を 入よほひを

やむくもあそいそよふ月のそ

十六段はうらうらう言のそめゆ

月を傳方をこひ世を傳てやと

こころとまはれと心えを 歌のそで

傳てよあ月傳の高りあはら茶歌

力

月を去る人こゝろふりしを旅の者

うらう男さるすあうらうの月

影ハその下でひめ、月の影

実や月 百ちちを金の角を

そらめいやは戸をすわしを山のぬ

せのちやうの月をこひ世を傳てやと

約の婦もをいしを旅の者

ちんあうをいしを旅の者

のそらめいやは戸をすわしを山のぬ

うらう旅てあはら月をこひ茶の煙

神話山

二十日月の...の杉松控爲
川舟やよみ茶よみ酒よみ月夜
古物傳々古實を語り

月やその詠の木乃のり下西

鹿鳴よて

白平一 指き両成をらあろ

田家

芋の葉や月結里乃焼まひ
ありの巾ふ時陰あておの月

狭捨山より

おりのやや狭捨より泣月の友

善光寺

月うらや四つ四宗を在ひら

湯乃庵

月...名をほこるよておの神

燧山

茨沖の二孫光の山々月や

え孫二寺つよの隣り月を記す

と重比の神に詣おりその古傳をす

月清しぬりのそとる砂の上

演

月のところ雨り角かえなうりなり
仲秋の夜寂然ふとすりぬあるりの
物清まほ海より鐘のしるこく徳を
國のちのあふを介するを徳と説
下きになりしあけの後はあすとす

月いつて鐘はさうめらる海乃夜

斜嶺亭

戸をひらけし西よめ伊吹と云花

見よしはあもすは品歌ののしあり

そのやまうり月もたのり伊吹山
伊勢國又まももよとあしれ徳はま
男のうりひく物とすあやまふれ
旅の心を安く侍らぬの日向のあは
を切し房をすけし世にまは
月をひよめあつる乃は舞世舞
悼を家と云は平

そとる砂の上の月
わが名を四角なりけを畫の月

正秀の初會

月代や膝うしををい置音の石

消息

水あすくすくし庭も夜やあつ月の

染の尾とすに中其名をいもせり

このやうきそのまをいもせり

山に信々信をいもせり

よし山家集よのせり

みやとすくま坊あつり

染の尾り月やそのまをいもせり

梅窓と根

丸夜起てり月七つこの形

柱杉尾杉尾の橋を別位ひるま

成水うおとまをいもせり

まをいもせり

まをいもせり

深川の末五本杉と

川上やこの川下や月友

五本杉と

八月のあとハ批乃四阿の形

葉せ尾よて

今よふ誰より望の月と十六里

暁いさう歌月下さ思

月よむじや栞怖いなる思の佐

そ極なりうそ

秋もろくもろくうろく雨うぬう取

山さき—心のまこやぬる月

栞やすうかりんいつまきむこる

識立や有るう想ううううう

をい語を思うゆるけり望の雲よて

約 砧

あつたりのあつたりのよのきぬとられ

剥きこころをきぬこのひよふ

よ—想ううそ

まぬおたてのれよきうせよや切あ

毒のほろよ小斗は初くきぬれ

猿ひまはさるもの小袖を砧う那

うま—何—の像

むし雨を脊中ふれうそ—葉切砧

遊め乃毒漢

枝うりのひんしうのうそ—あまう那

薬堀

葉草

鷹来ね

芋

馬桑

粟

蒼葉花

まきりこのうらぬかまのまき汁

くまどうや石のまき汁

ごうくうまき汁

馬桑や軒端の秋のまき汁

松の竹葉軒と云尾をまき汁

粟解ふまき汁

まき汁をまき汁

よきまき汁

伊勢の汁

初茸

松茸

茸指

早稻

秋刈

落穂

二月の地におかぬ

まき汁

松をけや

まき汁

かき汁

かき汁

かき汁

かき汁

かき汁

かき汁

秋夜 秋の夜 茶の木 けしきや ぬき
渡鳥 目 けしきや けしきや けしきや
四十雀 志の石乃ありとも けしきや 四十雀

鷹 病石のおきき けしきや けしきや
鮭 鮭ののけしきや けしきや けしきや

鮎 けしきや けしきや けしきや
紅葉鮎 けしきや けしきや けしきや

仲秋の月 けしきや けしきや けしきや

後の月 木石の破もすきき けしきや けしきや

名残月 石山 けしきや けしきや けしきや

升の市 外 けしきや けしきや けしきや

内 けしきや けしきや けしきや

御近所 けしきや けしきや けしきや

山巾や茶ハたをうー湯のふひ

木田さ

ほふや月ときくさうー田三反

みりさ

瘦るうらみのれ又茶のほふし外

すくのつゆをうひらくハゆさうれ

田家うー申さる

穂こきの焼えわさうーすくの花

望月の何ー木段屋の足さうーはれ

お粟六站の中ー茶方繪とさうーはれハ

増え来し碓も及ましく乃あやみ外

九月ちしおさ持を携来うれハ

そ乃戸や日されされさけさくの酒

ととさうはあけや理分の後のま

城水さうー

影跡や茶のさのさうーさうさ高申

八町屋さうー

まこのささくやる屋の石乃百

大し茶さうー

琴箱や古きもの店乃皆石のき
園めいさうりて

白菊の園より立てて刀をさす
赤いさうりて

おくのまのや赤いさうりて
菊のさや赤いさうりて
さうりて

菊のさうりてさうりて
さうりて
さうりて

菊花讚

おくのまのや赤いさうりて

元禄辛酉初冬九日素堂菊園遊

重陽のまを神と月夜のまをまけけ

よひまのまの花いさあまのまのま

軍時良重陽とさうりて

のさうりてさうりて

神と月夜のまをまけけ

おくのまのや赤いさうりて

いらつとや豆腐了りて

紅葉

忠水別荘

木の實
核の實
椽
掘

籠り居る木の實をば実拾ふや
核のこころ。棟ののぬきやぬあし
木ののとうき世の人のあまらふ
於や伊勢の白子の店さし

田代并しき堂由喜の二つ

柿

菊菊と柿とうきしよまのの尾

志の柿や一口きとあ猿のつ

望の素濃の休

祖父と親その子の店や柿こえ

片野里翠

行秋

暮秋

里ありて柿の木をばあおえき
り秋やふる引すよ三布蒲團
蛤のやこころしりれゆく秋そ
り秋の於るのきやあまらふ
やあまやまをひらけたる葉の縁
清水の茶店よりあふ

おん乃軒をわらうて秋をれぬ

懐老社

ゆ幾をひて昔秋歎よるる

秋雜

月... 秋
雨の夕やさるの秋を 課
後家の秋をのあふれをさあけり

海川の底を旅まきし

秋千... 江戸をさるる郷

鹿嶋神前

よの松乃 実生せ 代や神の秋

田家

かりげ 田面の朝や 里の秋

首列

さしあうおろしうのあはれ乃 林
さしあう秋よ 聖寺の朝の鐘
あまを庵りいさるるれ

秋涼 小松吹花子

小松吹花子

さる... 小松吹花子

種のはな

あひ... 秋

列位

旅夜や 森のさるる 小あきの

地味ししとくしし秋の葉を
小名木は相実母り

秋よそくししとくしし
車庸亭二句

あきの夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

あきしし秋の夜ふくちの
あきしし秋の夜ふくちの

小春

冬之部

月の鏡少きもくもく思ふや目の雪月

初対雨

人の海をわたりて

まらしとれ初の言は我対るん

もやこまもくもくいふおのむもくも

宿はうらめしくも袖をくもくま

おもひありあはや旅人

旅人と我名よききしとらしとれ

伊賀の山中

何つとれ此旅も小春をとりて

冬

時雨

海六のまき

いづれもくもくもきよれ初時
わくしと社と水子れ所のあま
りやや大のあまのむらき
いつく時を傘をさしけし僧
空の竹の音やうたかた小豆飯
た田村大夫の

了と小碓や降て小石川

さきの雨のうた

か平もなき我を

相葉のぬ 志海

きすくきすく

は海うらまの種

まの枕大いし

しるもや舟の帆

船のまき

一尾根

あまのまき

他り木のうた

新田のいさよ

土まらや田のあら梅のつまむね

湯白輝塚本とあやうに到る

宿りして名をあらめらるる時

百士をあらう町あり大井川

彩葉のあらめらるるやまに

山城へ井出のあらうとせ

こ子廣

人こそ一々あらはるるいとも

笠をききよのあらう白くは

傳つていふ人我まあらはる

さるるあらう物あらうとこの

國うらまらうよの公に國あら

出るまらう結る

相りていふのあら竹高は似る

竹のあは

や竹まらるるあら

木枯やあら痛む人のあら

三河彩葉の家とあら

木枯

初霜

来り倦てまゝにやふゆ任に
風来ちり葉籠りて
あつてふ岩吹らるる松百の乳
初一とや菊次りりる腰の襷
秋子の石の初霜の心とまはる
あつてりりきゆもあまらむ
あつてりりふゆまはるる
雪降りて
はつゆまや幸一庵うまうある
幸大佛再興

初雪

初ゆまやいつ大佛の付らま
ろつゆまや雪小僧の髪りり
深川大橋まらるる時
はつ雪や掛りて
初雪也水仙の葉のたむま
山中ふ子竹とあまらむ
初雪も急の皮り髪つる乳
芥焼やとと海の田井のはら水
少ゆも母りまらるるはんまら
金角り松の古びや少ゆりり

初氷
冬籠

時酒堂

酒水の破々たるはあつた田原一匹
若君の胸のまをさかすおろしよ
月もふるまふまをさかすおろしよ

飛皮津や田原のまをさかすおろしよ

控せりおろしよ

と存望を去て志付く田原
方をさかすおろしよ人あり家僕何
く水木のくあふ身をさかすおろしよ
心をさかすおろしよその標ぬり腹

功をあつたおろしよ調侃おぬを去る
謀やさかすおろしよ人をさかすおろしよ

そのハカキをさかすおろしよ下位
在るの上智の人あつたおろしよ
鐵肝のゆひゆひをさかすおろしよ
その善をさかすおろしよ

先程へ梅をさかすおろしよのまをさかす
おろしよ

おろしよ伊吹をかさすおろしよ
おろしよまや友友表りおろしよの表

煙用

支梁のやま

口切
口まきふ堺の庭うまろく丸
神の守
いさきの百うあはる神のる葉

お花月のそめ武内り列

神の旅
都出そ神え旅旅の口敷う丸
夷溝
えむ久溝砲賣ふ袴急せうたり

所命講
菊野既きうつうくう所命講
消点

はる海や油のやうなほ五片

冬枯

あゆり社や世ハ一りそく凡のき
あうせの残りしるをうとそく玉丸
月のほとすへるの無寺う旅の
心をばりて

救の糸

さうう渡や深くちるをそく
尚ちこの下田う地をううき
既よる筆子及やさうや所量
あまかのこもけよ白竹樹ひま
おる老うとまうとさう木い
そのううそ時終まそ病う丸

落葉

百重のりきまをたぐのぢらは八
多入及の権現をさるる
宮人よ我名をさるるせ落葉川
大津を思ふ

木の葉

三尺の山もあらしの木の葉は
おとせのまを秋中よ何とて
石を深川のほとりふらふまを
ハ古来名刺の地さるる
金なまよそのはらけさるる
りし人のかこりさるる

浪花

子のたより葉を木の葉さるる
耕さるるり
さるるにさるる
逢社園二句のり

麦舟

麦生さるるさるる
刈あさるるさるる
消息

大根

三十里尾張大根乃話の形
菊の後大根の外さるる

消息

口上り素夜一りり土大根

大根引とつちり公

新毒入り小坊主素也六根引

三席子旅籠もそそ菜根を弊

て終白大夫入り証語を

そのくふの大根入り本に部心

五郎の及層をさるひ

枯草 花皆くわしあしおきこゆまその程

瓶田とて

枯葱

そのふさりわし餅ふやせりれ

三林を睡て深川のそ尾り

師をれは宿友つ一人とよそあり

事そいりまかこそえ侍

枯尾花 ころかろもたしそや重のそ度花

葉名古蓋りり

冬牡丹 少ゆりんそまのよこ重の回とま

瓶田橋人こりそ登重の用を

物そいりそ

水仙 水仙や白き障子のころうり

寒菊
枯野
表

三河まゝ白きとある者の子二人
一桃先桃後の名をあつて
その少白の桃より白く水仙を
言ふまゝくや粉粧のくも白の端
旅し病く夢みくれのをうけまゝ
負山の雪をまろくつらまろくまろく
一もくもよ喚ひ辛く雪の花野水
りくくつと折や一處一竹の表
お屋四友子然送る種念やまする
おれを踏く踏破ひとまろく送る

糟田一 おれの花刃る朝の折
うつくしき庵しおの袖や折のえ
よまろくや竹 折くまろくまろく
お杜園二のつら
まろくまろくおの病
菊の葉の表見くまろくまろく
病中
まろくまろくまろくまろく
深川 古橋本橋時
まろくまろくまろく踏橋の

町内をやまをこりて松の雪

耕月

雪をまふ上戸の顔やいな雪う
あゝ水交る帷子雪をふ紋の乳
星森成河とつふもむらさきのゆま

ふよおとむらさきの人の心をまて

志向川少きやせはさるる乃の雪の竹
笠の緒や咽泣 ちる富士の雪
ゆまのらや羅紗の羽織うたき新
浪の花と雪をや水うらへり雪

ゆまの雪杉深を園の葉まを
ゆまの竹 笛吹人うらあえ
雪の初ひくうて雪を噛むうら
ゆ水うら光年うらめは雪の雪

廣うらうらうら

深川や根こりの雪意雪うらえ

松月

市人うらうら雪うらうら雪

松國うらうら雪うらうら雪
うらうらうらうら雪

雪とゆき、こころの師走の月、
若根こころ人もあふく、
旅人をかへる

雪とゆき、こころのあ、
さし山自畫横

庭掃て雪さやゆき、
閑居歳あきさく

酒のめえ、こころ、
雪海野業、こころ

雪とゆき、こころ、
雪とゆき、こころ

雪とゆき、こころ、
信濃波をさる

雪とゆき、こころ、
雪とゆき、こころ

雪とゆき、こころ、
雪とゆき、こころ

雪とゆき、こころ、
雪とゆき、こころ

雪とゆき、こころ、
雪とゆき、こころ

湖水眺望

比良之上 雲をきき 又もせ 湯の橋
大音や 波めく びくく 住の敷の家
日影にまじ 鶴も 雲のあし 一と 霧

小町の盡漢

昔さや 雲や ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ
昔も 尾よ 土あり

木枕の あし けし 拭ふ や よらの 音
こき とも 梁 たる 住む 住居の 南
竹の 漢

雪見

老してハ 音 終 竹 の り せ せ せ
抱息ハ 重ハ 吳乙ハ 音 せ せ せ せ
古逢の とも 床を ね せ せ せ
城く せ せ せ せ

二人 見ハ 音ハ せ せ せ せ せ せ
いそらハ せ せ せ せ せ せ せ せ
雪見 何ハ せ せ せ せ せ せ せ せ
居き せ せ せ せ せ せ せ せ
秋 喰 せ せ せ せ せ せ せ せ
ゆ せ せ せ せ せ せ せ せ

雪丸

軒をこく桂屋采を好む人
すりうここの成るあぢ音
くつ訪きこ

君火をこけよまおれせし雪丸

深川をねの成

氷

樽の聲浪を打て腸氷を製液

茅草雪氷

氷若く偃亂の咽かゝるせり

あつつ磯のま

いそぐりやるそくこる新法師

雪丸の趙南の心をいづる山家集
の歌くさ

一筋もこる雪丸のこる雪丸

瓶日かすおの氷の二粒とありけ

いそ子信をりまありくこまあり

石山の石をりたるあまき氷

霰

自盡自漢

いそめまきやあまの檜笠

膳ふのそと尾をくつ訪き

雪丸よあまの氷魚を煮て出さ

与或人

みーらぬ名や物まき書あは
ぬらふ中まき

琵琶りの松や三弦の如と表

再昔首鹿を告いもまき

あふ中や此方ハ、まきの古柏

いまこ立鷹引 まゆるあはれ

新水り琵琶まき、軒のあまら

比下の茶店まき

松葉を掛てまき、拭あはれ、まきの

まき

城人の吉田の酒まき

まき、水や、まきの旅、まきの

え、松葉、まきの、まきの

まきの、まきの

水まきの、まきの、まきの

錦、まきの、まきの、まきの

塩、まきの、まきの、まきの

仙化、まきの、まきの

袖、まきの、まきの、まきの

葱、まきの、まきの、まきの

山眠
火燧

園遊
火鉢
火桶

炭

埋火

頭巾

こららのとく名ふのこち猫山

山を猫眠といふや二重のひる
きしくまきしきれきよ啼こころハ
住つぬ旅のこころや 豆あつ
祝このむむあ良の住所こころは水
五つ六つ茶の子うきふおろ水
深まや 是も浅まの火もろくれ
あつこのひの土よりおこる火桶な
古き代をーのひそ
高の炭 掃子 吹る火桶 柳

小野炭や子野ふくの存せり
白まきやの北浦鳴り表乃兼
消すまき新しきまき少野の菓

埋火
埋火んまきや渡のまき
曲翠旅報

埋火や野まきまきのけぬ
舟徳島の横
雅名やまきぬまきのまき取中
保川いふ中

紙衣

米買ふに旨の感やち中
取中忌に親事しや珠を丸
りこもよもやあや置くと
あつてしきりしよとる紙衣

李下、妻の悼

蒲團

ふきふと蒲團や言き
画漢

食

たのむそよ麻湯なき
後押舎鉢敵を待てし

鉢敵

去哺の横心めらるの
物まきる者去はれはらる

霰酒

乾鮭

以豚

子代をす天のそんつる
る鮭や何れ一皮そ毛
あし何とんなきあよ
何縁汁や鯛もあるあ
あま家うたきぬ僕あ
うつくおまのをし守る

兄弟のそまにそむや

桑名うおそ極面う

あまひまぬ何縁つる

生鳥籠

生をまゝしひらく子に秘るちま方こり乳
尾張の國概二田くまうりりりり
くく師走の海にんかか海に
出さし

鴨

海をまゝかむの海にぬのくま白
籠あり寺あり

子鳥

山鳥よ我かかのもを痛く育すま
籠もつてくまかかかかかかかか
一ひきのまのくまかかか川ちり
福ありハ 松尾の里 味酸あり

鷹

鷹のまゝくまかか寺ハ 鷹の鷹日
里をまの園をかかかかかかか
杜國をかかかかかかかか
たかかかかかかかかかかかか
杜國かかかかか伊良をまかかか
鷹のまゝをかかかかかか

師走

鷹のまゝくまかかかかかかか
月白の師走ハ子語かかかかか
十二月の一日かか
松尾ハ 鷹ハ師走の中 月白

煤掃

まき掃やまきりちの言新
旅寐して尺一や浮世のまき掃

旅行

す、掃、ハ、杉の木の百廿、嵐、の、車

り脚の五黒一、難波、旅、置
まきを、手、睡、て、海、通、ら、お、う、ら、を

是や世の煤、う、深、ら、ぬ、古、盆、子
まき、掃、ハ、お、の、う、棚、つ、る、大、二、の、丸
ち、の、丸、三、十、早、道、一、一、ち、の、言
と、此、く、て、餅、を、餅、の、目、は、採、ら、る

餅揚

餅花

名、水、の、籠、の、巾

祀配
古唐
年忘

松崎や雪の志、地、の、ま、ぬ、く、ら、り
う、し、と、ま、き、よ、ら、ん、や、ち、の、ま、き
年、三、と、此、三、人、寄、り、て、喧、花、の、車

滋の法、並、列、南、京、桃、丸、具、り

ま、只、ハ、神、を、友、り、や、と、一、日、を、ま、き
ま、ま、く、埋、火、の、消、中、ら、ん、瞬、日、末、京
都、を、ま、ま、出、て、て、あ、ら、新、電、車、
ま、ま、を、待、て、

のあましよはひさしよもさへはなれ
たえ捨つるも初冬のうらみのこころ
しるもはよりあましのまを
経て伊志の末伊志の山中よ別
ちる父母のいささきせよまを
あしよもさへはひさしよもさへはなれ
ありし

古々や腸の緒ろくはどりのうら
盗人ろくあしよもさへはひさしよも
蛤のつけし甲斐あれとろくを

ふ列のたをまのろくを
畫讚

行年

ゆくやみう親の小松うら
りすや菜うらあしよもさへはひさしよも

大年のた盗うらあしよも

冬雜

梅てふ通ふ雪のあまをさへあり
石くんそく氷志のめやみんす
面白くもやをさへしあゆの二回
きり節の友やあしよもさへはひさしよも
やあしよもさへはひさしよもさへはひさしよも

大通庵よりそ園を土茅名をす
りきりしはまふまふとくんと
契て終ふまふをまふた初冬一
程の雪とほぬるまふやひや
めりふあふたりとて書をすて
まふまふまふや枯木の枝の長
或庵より

冬庭や月かいとある 雪の吟
三河國風来ちる 詠るその
邊より何の病書りて其書り

書より一程のまふと

物忌ひらら杉の山にて旅探れ
ありあふは杖つき坂を落るるか
朝よまて誰か峰を片ころり
酒飲るる人の繪り

月花もたきて酒のむひりれ
貞徳宗鑑も武の畫像
二為ハ風雅の天工致しける心
匠を美来り傳ふまふよ遊之
その誰か他は城あふまふとや

無季

月夜のそらやまののこさ達

歌花けし

は根のむら—枝の木の

瓢の銘あり暇を

そのひらり瓢のうらぎ我世のれ

布袋の畫漢

ものや子らの中の日と花

城の新写し

海は降るやこひはようき者

境よりていさうらえし都

世の降もさうふふ祇のす

骨菜やうらもえらうり塚のうら

うら心ぬ返取よらん袂のれ

我々たるもの少くは人の秋のふれ
 少ゆにこそ柳二三の里んさうせり
 多うく今月一くちうりう福壽子
 點禮うきぬ人あうつさき
 山菜もさうし眼をさす一さ地水
 うさひの三足刀の中柳の丸
 角をさす河川にんや柳の丸
 くの花をさすさき家路水
 少る丸清水うさきやさの丸

人

蒼虬 菱波 沙鷗 柳陽 斗圓 孤采 桐雨 西月

この人の枯やうもなまの屋をハ
水もル寐入きうや花う月
あせうといも水う言一二月
秋三月同ーソうなう屋うー
夕山や百のうーをこり葉吹
その買う二人出たりお言ハ
葉あふやまうとまはるうううう
やをこりさうう秋ううてさんハ
麦の秋お肉うううてりうう
あう様やまあ水うううの秋

有月 平山 庚辛 禾木 緑啄 壯噴 碩布 小圃 大栲 八采

うあの外、えをううう木や坊、庭
まううううのむう水もや葉を
のう及在屋種のもうのまう一うハ
中ううや葉おやうううの郎花
葉ううううう多うー三ヶ日
やううやううーううううう
人ううて花うううのううう
まきう葉うう一う花のあうーハ
山ひううあううもううー一の川

山塚

梅室 栲通 太志 茅英 柳絲 南浜 丸起 栲候 芥舎

さびしきまのトヤロあく疎の貝
しん山はひこさきく柳の如し
しらきや申しこきりー救柑子
いそつるや鉢水とそきり寮の窓
いそつるの望丸とそきりあせり
梅きくや重のつらきり明ぬ木戸
そやけや善相とそきり鴨ひろ
いそつるや耳よとそきり聖の尻
号やそとよと枝りー三蔵の程
いそつるや木の君の雨を鳴るん

岳風
杜鰐
文翠
慈池
枝月
壽堂
杜鵑
みす
万籟
岱年

太りーやはめハものく丈夫なる持は法叟
三まの枝よなるよおや少ゆこきり
つあそ木の太りー喚るそとそきり
井火まそハさくけとらもとそきり
おろ入るそとそきり色やとらもの可
あそそとそきりよとそきり水噴ふとそきり
おき捨のよつらとそきりやとそきり
大降のーとそきりやとそきり川の
阿そそとそきりよとそきりつとそきり伸
うとそきりのおとそきりまらけとそきり飲

法叟
祇白
白鷗
曲阜
林左
五緑
識兄
其山
素屋
林曹

うらぐもたけきまらう水てさのこ
ゆへにうたねをこもる小春りれ
水衣やゆけものこりてのまらう
秋風や箕うらうらう響ひら
水仙や水きつて萩の外
さるもは又らおらひ里やうも子波九華
しと銀見て合点の中あぬ佛の生母性寸凡
経よむやう茶のこけの一住在 佛兄
若冲よりけや煎茶も一ふらら筑あ可壺
あめさよせよもも日のまけよぬひれ 字逃

さうらとまらうのひねちやねあぬ
山茶茶や山寺な水てさる木 經壺
のこもねをこま年うらう響ひら 有山
水てさけつてさるあぬわのこ水 試壺
きりこく戸のあつちを猫の別れ薩摩山骨
一つさるて一つ響ひら梅り那 素秋
物の言ひもあつちをさのこも 波文
ねもさるてさるけりよ小孫あけの白 五木
咲けり物もあつちをさの中 双鳥
さるもやまのさるてさる 真壺

川尻よ成て危——残響の海 純岳
「方」あ方と刃ゆる 醒るわは伊勢常原
吹かせぬやうや 碓ももるの凡 柴人
尊業よ少のせう——うむの菜 映つ
水まけし水もまよなる 黒く風 阿波 露永
うけふれはせしものつと 扇の南 太卷
青光何も ぬくわとまひひかり 風橋
もつあをさるるもあつともなりぬき 菜桑
人（こ）うきをさるるもあつともなりぬき 涼枝
出るとまや 水よ中とまや 反の月 淡波 今尾

いさるるやうまよまのまき——碓のこ子 辰推
本もまきこき——鳴鴨を——小石 淡路 半次
壁をこきり 藪あり 遠く 樺火 亂 伊 閑 那
炭竈や八口の——一々 あり 伊勢 省 吾
望まば——いさるる 小月の影 水 赤
出口より 小波と 飛出や 鶴 牛
うき——いさるるまき——うき——回 ま 瓦
り 碓 やつき ぬけ せし まよる の せう 雀 史
橋 侍 の 中 の こい 口 を ぬき なる ち なる たり 園 輝
井 の 子 を ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき 石 鼎

こゝろやまろきこむのねに
 りんごの田の水高やまのらひ三河
 猪のあつちも山なりぬ荒哉
 沖あれつてついでに新海水
 起るひしうまの池やま子を
 ちんねやまろなるのたより水
 雪汁もこうらまろなるのたより水
 ゆうよこ時ふそなるふ陸り南遠江
 ち合の七子なるなるやまろり
 ちまにぬねおまろりは抜りぬ
 思又
 卓池
 水竹
 塞馬
 青可
 波文
 喜江
 且松
 未産

うらな屋の藩海をりやまき家信徳
 忘ゆけしこころまろり座のねに
 みのりの窓や木の葉の高まろり
 ひろくのまろりおんこけぬ母水
 高のあつち荒はらうらまのち
 捨てハサ利まろあつちまろり水
 晴まろり水まろりまろりまろり
 一と水かろりまろり出つてあつち名を
 鴨をぬまろりあつちまろりまろり
 月の中こころり別よゆりまろり
 業
 標平
 白兔
 鴨醒
 神甫
 近祥
 様為
 柳壺

降きととあちちよあし水
 二二のしして月のあつ登この角
 りめああてさし時のを山の雲は光
 松松の眼先ふきくやるもまた城後
 折ひさし敷のあつきき芒うれ
 起きてくもや蚕の棚挿珠
 おりあつて月のけきすれ涙糸
 一るや花をすまらひの急るな
 みるやのささしるりや碓さき
 奥松提きもこのさしむ中か

延平 年緒 乙良 茶山 あま帆 姫山 夏相 西晴 北洋

山やそのささしるりもこのあつて
 うさくく木もあつてささしるりは水
 のささし樹のこのけきをささしるり水
 あつてささしるり心ささしるり出
 せしや隣の家の方ささしるり
 うささしや一ねやささしるり
 木松をささしるりささしるり
 ささしるりささしるりささしるり
 葉はささしるりささしるり
 市街あつてささしるり松の花

延岡 朝卓 谿成 所凡 二五 太福 淇節 多よあ 溶こ 芳阿

あやめくふふまきりり家松の漏
松つるや疎よらむ子のつひ中むじ
つるとあしし初きをたしむぬ露汁
底ありりして日のくぬるまむそん
結宵や虫の消せし始もつげん
まお月やたうひく氷のおと
あしあすうらや蛇の身も死んぬ
トまのやせりこまらぬむのこま
ホきのまやあしりのこつア
まらしよまらぬ田んびををりか

卓坐 英泉 心阿 江三 未月 二物 二晶 多用 茶油 精為

焚きまてし結るあやめのけやおのち
焚籠や葎戸をま過る人のけけ
穂うらうらうの底の日の照るまホ
又深れそ見えたるそのまら月の
出ぬけととおひのまも木下やこ
まらるるも残つてむや初るる
柿の木もまのこりこる小里のれを陸
まらこ出てし舌のまをのまこらう
横所へまらつてしまここの川
舌少くし小まらうまらや猫のつら

守三 南幽 清氏 一加 加菊 双鱼 野菜 一地 二峰 溶水

石のぬくまうき言のおゆり
うわおのこ儲きや厚補いあ
桐の煙のとりけりや福来りま
おんそまこふもやうわのき
まらうとのりく花の山うつ
えつねんよ流つひはあつてきん
笠粽男の中うまぬけや
啼きもたけし人聲も林の中
とさわいて袷忌なむれゆわん
はま流の柳木わくり

湖井 歌秋 新帯 奇哉 さら丸 小香
未足 帆突 其翼

ゆかぬけふ言とまそなる余さ
ゆきさふあうたふしけけのきん
茨のよのきつわさあお丹うさ
き無木の花長ふわう一里塚
坂屋うーまきけしたつてのきん
よのやうはあ本はうらうら
乙の川うらやふふ然すとこり
出代このもまやあや晩つて
いら水をよけのきく宿をれ
影よけえらや夕日のほくら

ゆふ 岸高 竹烟 外 嵐外 雷石 喜楽 欽武 養育

秋まうらうらうと吹くや垣の内
旅の程の明やうてなすのまらまら
葉の上のさすのさけあるほえんれ
門むらうりのあさるまそおほく
のり月梅とあまあるの舟
あまらやんあゝ方へ向てさく
くのはさくぬとまらやあゆの
まらまらやつあゝとよ川は入
甲お流の堰う水すひはのま下総
まら柳のま下あゝ二世のみ

米林 一 位 方 國 糸 阿 就 甫 一 号 一 十 一 史 井 南

あつらうて置くらまきんぬ舟の梅
まらうらあつらうらとあゝとよの月
ゆけとてひらういさあゝとよの香
満月よまらまの木のまらあゝとよ
まらまらまらまらまらまらまら
凡あれまらまらまら月あけ
新根つや松葉端口うまら
あゝまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
おりあゝとよの片つらゝまらまら

山 野 百 什 貞 高 既 来 李 華 士 明 蒲 馬 以 月 桂 牛 乳

三月月夜をせんむらさきのいまひら
まら林のうらむる水いとて書ぬ
醒れ一もつれんせきののきり
りのその親子とていふ火事と
花のふれ木にも命の乳とて
まのあつこつりとも痛くま
こやつたまへし木立のちつき住居
まらとてぬきやまふ致出ぬ内
まや花のゆふにうけるよぬひれ
ま山の物とてかゆの月りれ

梧成
青岐
可丸
青藍
汶水
麦人
玉潮
春旅
乙放

一ひらきよまはるぬきまのい
橋のそとよきまをぬゆれまきの山
相のふきをまらしてやぬ初れ
凡きよぬきやつ田のうらうら
まのうらうらとて信口もあつた
まらまらまらまらまらまら
魚のふてくまの肉出まや書ぬ
一まらまらまらぬきま柳れ
あまらまらまらまらまらまら
まらのおや川のまらまら水の高

比古
立物
味峯
まら
一甫
岸鐘
駭馬
士祥
大照
大眠

あふふハ必あるや 左のち
城うま里や家毎うまの花
海のうまをけりあをそひるを
月の中をうまをそひるを
凡そうまをそひるを
うめまやあまのうま
懐もまをそひるを
まをそひるを
まをそひるを
まをそひるを

杜有 凡部 在雨 秋香 凡阿 大鵬 素瓏

あふふよく月もあてき花の人
新しよあふふよく月もあてき花の人
柳中のまをそひるを
飛きつてけりあをそひるを
うのまをそひるを
あをそひるを
あをそひるを
あをそひるを
あをそひるを
あをそひるを

洞天 謝堂 山谷 茶静 白起 篁庵 夢窓 氷心 完哉 雲山

風はけしつていよまねり
涼月の吹くくさくさ
ゆく年よゆきよのつき
ちよ水と別 柳哉
き一ねうしそりしものう
祝ひのそいふもなき
橋の下そりし岸なる
さうともつてさうさ
庭をけしつていよま
中む首一層とてさう

素明
杉露
杉井
吉嘯
浄友
樹村
魯中
辨芝
菜石
八百景

のるるとおひさし
柔風や何と交さし
月のあふれ枕
うくひんやさす
せりののろくち
おもひはさし
そよよのつら
ちるるるとい
さういふ水書

小汀
龜野
清河
仙巖
喜悅
推蔭
多景
多景
千瑞
里雪

唯のうめ

雪もたふく朱の樹も水も流る松の
雪やうも土に下りまき水も流る松の志
くりに底周のひびつて茅の根も
千ふてうもりのとさぬやこけ清水
山をこまき月やと水の記まら
耳も舌のあはれまき時あるは
梅もくろ雪つむ中もワケらぬぬ
玉水や雪の軒ももまきのいろ
く水際も雪をさけ出り山の月
町中や二日おと水もさけ見ゆるる

交輝 葛聖 桂榮 志一 月貨 冰佳 太珉 巳千 赤光 赤鳥

まのよし時一まよ松中の夕の口
り松や一たしまよ松の垣根草
ワ、長雨のふしももをりり水
おと枝もろのまよおくやゆの梅
くもまよや一しのふまよる夕のりり
くつ木堤のくもらのまよるまよる
こまよまよはまよのまよるまよの牛
くもまよまよ高士ハおむらまよまよる
まよるまよるまよまよるまよる
まよるまよるまよるまよるまよる

聴松 朱彦 小克 享瑞 味善 蓋雨 田更古 五波 湖山 百都

少巾のねや熟くして水は月のとき
出て石山は白のくさなうまの宵
月よせしををあそぶる夜の火
るちくとわよ書のまきく水のれ
あまらや挿保まき百よ又ひく
漁屋の軒の水まらうて時るハ
啼き舞うのくよ別した陸のれ
耕先のあやうつまよ日本松
るら城の上まらうのるる太蘭水
のあまら鳥のくさる松のりま

水久 羽一 匠沙 五精 葛出 山史 葉景 董成 叩月 烏糞

物もや別て巻カきくのく人
田の水のにくうもまきくはの月
ひらうあそびるは入らう月言中
本まらまの浪もく人まぬあま水
くねねもくまらまのや山まら
人まらあまらつゆまらうらう
人のり泣をまらまのや松原
白の口やうまらけすて一挿入
まらまらまらまらまらまら
雨も水を除子まらまらまら

丸 乙 外 笠 又 米 弄 英 凡 芝 耕

去らうと月をこき帝や雪折中
 麦まきあゆ水しこもやひつ習
 ちんちんや朝のまきまき一足の花
 ちんちんや水はさしこもりな氷り丸
 雪の舞うを山のまきまきをり
 鶴のひらりおろしをりな冬木立
 下りのり人のまきまきをりな
 耳の人のおろしをりな
 雪の山に人まきまきのまきまき丸
 月をこきあちちをりな水折

壺天
 夷別
 旬光
 洒一
 东外
 素伯
 明年
 松可
 祝山
 属賀

去らうと月をこき帝や雪折中
 麦まきあゆ水しこもやひつ習
 ちんちんや朝のまきまき一足の花
 ちんちんや水はさしこもりな氷り丸
 雪の舞うを山のまきまきをり
 鶴のひらりおろしをりな冬木立
 下りのり人のまきまきをりな
 耳の人のおろしをりな
 雪の山に人まきまきのまきまき丸
 月をこきあちちをりな水折

岸旅
 白雨
 後里
 帰一
 表峨
 多古
 夕吹
 夕柳
 春林
 遊水

二葉の落葉一枝うらぐ標板ハ
蕨の葉の葉一葉の葉の葉の葉
りちの葉の葉の葉の葉の葉
うらぐ葉の葉の葉の葉の葉
とうらぐ葉の葉の葉の葉の葉
うらぐ葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉

志友 木潤 左介 葉水 杉外 右島 巳調 葉鳩 東牟

半もれなるはらりぬらう楓
見るとさう家う多うをきく子種ハ
舌の葉と結ひ一尾よももの葉
はらりと大細うらぐの一葉ハ
うらぐ葉の葉の葉の葉の葉
うらぐ葉の葉の葉の葉の葉
中も葉やたの葉の葉の葉
古木もたの葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉

葉里 青加 巳株 右川 葉助 羽人 木郎 水川 演吉

山水ハまじをさるゝやまのそ
凡のあゝのやとほまのりり乳
な水さきハなぐるまのしん
まの樹のそらふて君の中
松野水

保十五す甲辰み

松竹

追加

峰も溜水ありて
歌のりりまき
魚好くひら
鳴一たぐハ
まこつ水よつめ
株一そまもた
まこつ水よつめ

卦説
魚見
松竹
松竹
松竹
松竹

木の葉もつらよ引こもらば水
 くらりりありせり京の歌
 秋くらや大樹のうけ成たのじ家
 日のきりて氷きハ吹やももの風
 浪高のきりよきりけすしと
 あそろちや東しりくのそいし敷
 野のせやぬおしりこみおる
 やまの木のせいのけしりこみおる
 正月や掃ハなし不もあははら
 空と耳を鳴あしり水ぬ垣の中

石膽
 石
 素因
 株力
 要五
 白桂
 司外
 良台
 美備

吹あけしききききききききき
 口のあしききききききききき
 止し水ハやらよなぬきききき
 葉ハまきききききききききき
 下すりききききききききき
 一人つて来て居ちのきききき
 水底きききききききききき
 洋の根もあしきききききき
 竹結の火跡もきききききき
 のききききききききききき

多少
 米海
 如九
 鳥谷
 波同
 素因
 荷了
 田禾
 ふ墨

一及はく家く河原よまらる
 馬ちくく戸も明らき水陸故
 中の糸流川よりも城まき
 うめおよまらるる一とく
 丘まきく上りてゆく火をく
 まくまきく丸くはくまきく
 垣外やひく房菊のまきく
 有英 辨山 大糸 辨山 玄子 良梁 水

類題芭蕉句集跋

吾友松竹纂次芭蕉翁之
 遺句得一千二百餘首分
 季類題整為一集答曰類
 題芭蕉句集刻成見惠一

芭蕉句集

部且徵集之夫芭蕉翁者
俳諧壇上之廣大教主而
松竹者當今一位俳諧菩
薩也斯人而舉斯盛事
是豈待余贊張哉然已

則請製蕉翁頌一闕酬之
他日使名畫師造翁之面
像余董薰子重題其燈頌
曰天_ノ生物_ヲ裁者培_ス惟昔
芭蕉_ノ樹_ノ翁_ノ風聲雨聲

琅球夏唱予唱喁誘後輩
冥霧海表瀾鴻濛不持寸
鐵降羣魔攘邪歸正
振宗風打邑行脚可謂勤
雪中寒衞雨中蓬幾緬

草鞋一枝杖擔風握月西
復東到屛後逢場人送迎
竟使名號試岳崇嘒息嘒
芭蕉異凡草霜葉雖摧
壽至府五五十年如一日

樹碑祀祠禮盛隆辨
美準詩家例當鑄黃
金事此為松什曰善遂
以為跋松什號米泔扇
與余異門同調猶如素堂

與蕉翁時甲辰十月十二
日也

雲山老人澤維識
秋空殿秋原肇書

卷之三

四

三都 發行 書肆

同本	同茅	同壹	同日	江戶	大坂	京都
英	同	須	本	芝	心齋	出
石	町	原	橋	神	橋	雲
町	二	屋	通	明	通	寺
十	丁	茂	二	前	喜	文
軒	目	兵	町	嘉	兵	次
店	伊	衛	目	七	衛	郎
大	八					
助						
板						



Handwritten vertical text on the right edge of the page.

